※事務局記入欄

No. 188

【様式２】

エントリー学校名：

福島県　いわき市立豊間小学校

活動名：

チーム一丸！魅力ある学校

～児童の達成感を高める３つの気～

解決すべき課題：

震災の津波被害から 10 年が経ち、震災復興工事完了に伴い、本校周辺には住宅地が造成され、それまで復興住宅に居住していた方々が住宅を建て移り住み始めた。また、他校から本校への転入が毎年 10 名以上と、4 年前 74 名だった児童数はこの 3 年で 120 名まで増加した。本校では、家族が震災で被害を受けた児童への心のケアと様々な課題を抱えて入学・転入してくる児童への指導、特別に支援を要する児童への支援と様々な課題を抱えている。それらを解決するために、学校が一つの「チーム」として機能することを目指した。

目標・方針：

本校には様々な特色があるが、「元気・やる気・根気」のスローガンのもと、特に以下の３点に重点を置いた。

⑴　多様な考えを認め合う学校とするための道徳教育の充実

⑵　一人一人の特性に応じた特別支援教育

⑶　児童の活躍を最大限に引き出す児童会活動・学校行事

活動内容：

・現職教育を「道徳」とし、多様な考えを認め合うことができる学校とするための取組。（写真 1~4）・本校は全校児童 120 名に対し 2 割が特別に支援を要し、その 1 割が特別支援学級に在籍する。当該児童一人一人の良さと課題を明確にして、児童の自己有用感を高める取組。(写真 5~7)・児童が考え、実行できる学校行事の運営を工夫し、児童の達成感が高まる工夫。（写真 8～10）

活動の成果：

・多様な考えを認め、話し合う場を設定した道徳の授業や縦割り班で話し合う「全校道徳」など、意見は、それを考えた理由が大切であるとして取組み、「みんなと同じ意見が正しい」という固定観念を取り払うことができた。自己否定をしがちな児童が自信を持って取り組むようになり、学校全体に「みんなちがって、みんないい」という考えが浸透した。・SC による発達検査の実施とその活用、各関係機関を含めたケース会議や支援会議、保護者との「めあての共有」と毎時間の児童の様子を記載した「連絡票」の活用(写真 5)、定期的な教育相談など児童の特性や支援内容を保護者、教職員、関係機関等が共通理解のもと指導・支援にあたる体制を構築した。そのため、児童自身に自分の良さに気づかせ、将来の夢に向かって頑張る力を育成できるようになった。

・学校行事等で児童が「自ら考え、実行する」という観点を重視し「できるところに最大限の力をかける」を合言葉に、児童自らが「自分は何ができるか、どう考えるか」ということを意識して活動し達成感が高まった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

- チームで取り組む学校運営（校長のビジョンの共有、SC.SSW、関係機関の活用）
- 児童の自己有用感を育てる特別支援教育（支援員との協働、日誌の共有で深まる児童理解）
- 「コロナ禍だからこそ」逆境に負けない児童主体の活動

写真１

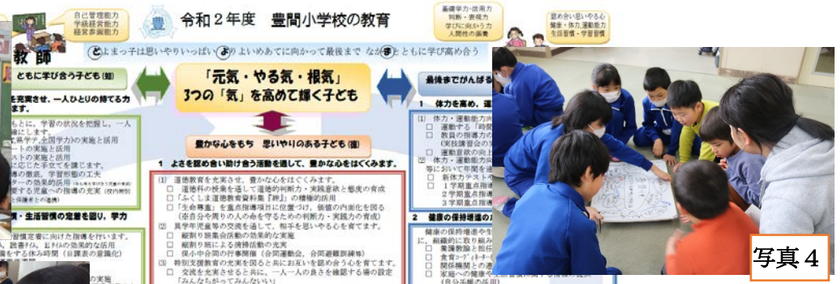

写真４

写真２

写真３

道徳科の研究では、「いかに自分事と捉えさせ、多様な意見を出させるか。」という視点から手立てを考え、授業を行っている。６年生においては、自らの意見を、友達の意見との相違点に気づきながら発言し、多様な考えがあることが当たり前という授業が展開されている。（写真１・２）「みんなちがって、みんないい」を合い言葉に、お互いを認め合う場作りとして「思いやりの木」を設置し（写真３）、全校道徳では、「自分がそう考える理由を話すこと」の大切さを体感させた。（写真４）

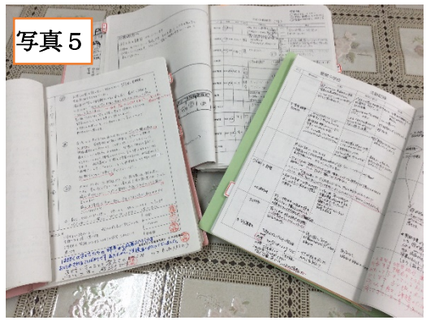
写真５

写真６

写真７

特別に支援を要する児童の実態に応じてどのように指導を行うか、校長を始め関係教職員で支援会議を行いその指導・支援方針の共有を図っている。SC を活用した研修を実施したり(写真 7)、当該児童一人一人の良さや課題の記録を累積をしたり(写真 5)し、そこから、各児童に合った支援策を見つけ取り組んでいる。(写真 6 は、児童の課題をスモールステップで解決を図るための手立て「ポイントカード」)

写真８

写真９

写真 10

本校は、縦割り班で様々な活動を行い、他を思いやる心を育成している。しかし、今年度はコロナ禍で様々な行事が中止された。４月、臨時休校を迎える前に「今何ができるかを考えてほしい」と児童に投げかけたところ、学校を楽しくしたいと放送委員の児童がＤＪとなって放送を行う「とよラジ」が誕生した。放送を活用する、ソーシャルディスタンスを保ちながらなど児童が考え実行する姿が多くなり、学校生活に潤いをもたらした。新しいアイディアがぞくぞくと生まれ、児童が逆境に立ち向かう姿を見ることができた。